

研究のまとめ

目 次

Ⅷ 研究のまとめ 111

1 研究内容1の結果及び成果と課題 111

指導の根拠と方向性を明確にする。

- (1) 結果 111
- (2) 総合考察 113
- (3) 成果と課題 113

2 研究内容2の結果及び成果と課題 114

子どもの確かな学びを実現するための授業実践と評価の在り方を探る。

- (1) 結果 114
- (2) 総合考察 116
- (3) 成果と課題 116

3 研究内容3の結果及び成果と課題 117

系統的・継続的取組のための評価と情報の生かし方を探る。

- (1) 結果 117
- (2) 総合考察 119
- (3) 成果と課題 119

4 まとめ 120

資料 121

VIII 研究のまとめ

研究のまとめについては、各学部の研究内容1、研究内容2、研究内容3の具体的な取組及び成果と課題の部分からの結果と考察を行う。また、本研究の終了時点で本校教師を対象にアンケートを実施し、その結果と考察を行う。最後に、全体的な研究の立場から両者を総合的に考察する。

<アンケートの実施>

本研究におけるまとめとして、小学部8人、中学部8人、高等部8人の計24人の本校教師を対象に本研究内容に関連するアンケートを実施した(p.121)。回答は5件法とし、すべての項目において必ず理由を記述することにした。実施日は、各学部の研究の終了時点の平成20年12月とした。結果の集計に関しては、研究組織の基礎単位が学部であることから学部ごとに集計を行い、分析に当たっては、集計結果を見ながら各教師の記述した理由からその背景を探り、考察を加えた。

1 研究内容1の結果及び成果と課題

指導の根拠と方向性を明確にする。

(1) 結果

① 各学部の取組から

【小学部】

子どもの全体像把握において、新版K式発達検査をすべての子どもに実施し、その結果を分析することで、これまで教育的ニーズに偏りがちであった目標設定が、子どもの発達を踏まえた目標設定や学習グループ編成につながってきた。

【中学部】

数学科の授業づくりにおいて、実態把握シートの改良や学習における課題分析により、子どもの習得やつまずきの状況などの細かな実態把握が可能となり、指導目標や学習内容の設定及び子どもの実態により応じた学習グループの編成につながってきた。

【高等部】

今と将来の視点から大切にしたい力として「3S」を導き出したことで、授業づくりにおいて、子ども一人一人にとって大切なことを踏まえ、幅広い視点からの目標設定が可能となり、学習の場や学んだことを生かす場を見据えた取組ができるようになってきた。

② アンケート結果から

【実態把握について】

子どもの実態把握に関しては、「とても思う：12.5%」、「思う：83.3%」と、ほぼ全員がこれまでよりも適切にとらえることができるようになったという回答であった。小学部では発達の視点を踏まえた子どもの全体像の把握、中学部では実態把握シートによる既習内容の整理、高等部では3Sの視点による実態把握がその理由として多く挙げられた(図5-1)。

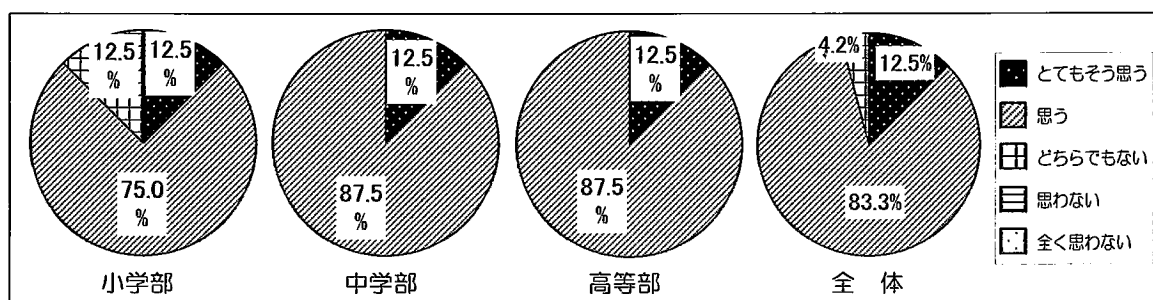


図5-1 アンケート項目1の結果

【学習上の課題の分析について】

学習上の課題の分析については、「とても思う：12.5%」，「思う：70.8%」と向上したという回答が多かった。「全体像を把握することで分析しやすくなった。」，「十分ではないが分析を行った。」など手続きの中で学習課題の分析を位置付けたという回答が多かった。また、「もっと課題を分析できる力を高めたい。」など今後の課題を示す回答もあった。(図5-2)。

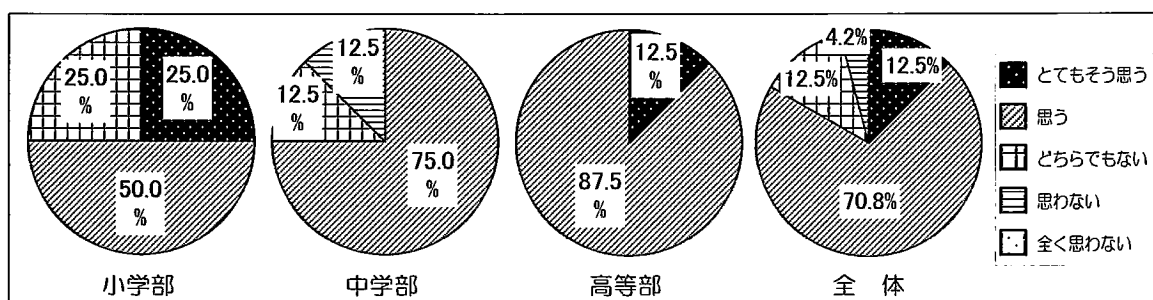


図5-2 アンケート項目2の結果

【学習内容の設定について】

より望ましい学習内容の設定に関しては、「とても思う：4.2%」，「思う：79.2%」という結果であった(図5-3)。理由としては、「子どもの実態や課題がとらえやすくなったから」が多かった。

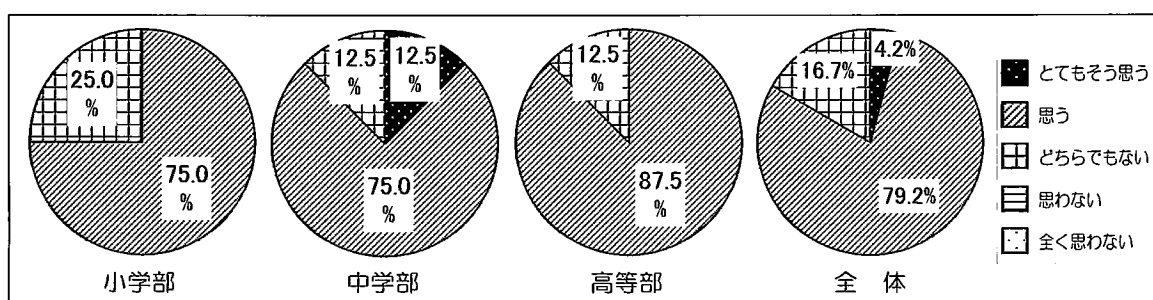


図5-3 アンケート項目3の結果

【目標設定までの手続きについて】

目標設定までの手続きに関しては、「とても思う4.2%」，「思う87.5%」と分かりやすくなったという回答が9割以上を占めた。その理由としては、「個別の指導計画の内容の見直し」，「手続きの図式化」，「教育的ニーズと学習課題との位置付けの整理」などであった(図5-4)。

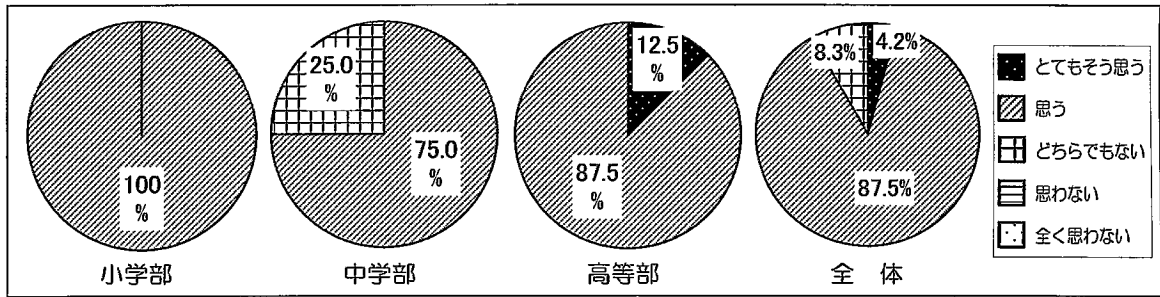


図5-4 アンケート項目4の結果

(2) 総合考察

小学部では、子どもの状態像把握において発達の視点を加えて全体像をとらえることで、中学部では、数学の実態把握の項目を細分化することで、より細かく子どもの状態像を把握することができ、学習課題の分析を良好にした。つまり、これまでの子どもの状態像の把握に新たな尺度を設けることで、指導の根拠と方向性をより明確にしようとしたといえる。

一方、高等部では、今現在の子どもの姿と卒業後の生活において期待する姿から必要となる力を「3S」として整理し、授業実践に新たな観点を設けることで、子どもにねらうことをより明らかにすることができた。つまり、高めたい子どもの力の観点の設定が指導の根拠と方向性をより明確化しようとしたといえる。

子どもの状態像の把握において、新たな見方を付加すること、見る目盛りを細かくすること、また、ねらっていくことに観点を設けることが、指導の根拠と方向性をより明確化することにつながったと考えられる。いずれにしても、授業づくりサイクルの計画（PLAN）段階において、子どもの見立て方を深化させる取組を通して、子どもの状態像に基づく学習課題の分析はもちろんのこと、妥当な目標及び学習内容の設定に対する教師の力量の向上が見える。結果的に、個別の教育支援計画から個別の指導計画に基づく授業実践までの手続きや、個別の指導計画等の書式がこれまでよりも更に整理されたと考えられる。

(3) 成果と課題

【成果】

- 子どもの状態像をより細かくとらえる取組を通して、学習課題の分析や目標設定がこれまでよりも分かりやすくなった。
- 教育的ニーズや子どもの状態像などを踏まえた授業実践までの手続きを整理をすることができた。
- 授業実践までの手続きの整理を通して、現行の個別の指導計画の書式改良につながった。

【課題】

- よりの確に子どもの状態像を把握することや学習課題を分析する力量を高めることが求められる。

2 研究内容2の結果及び成果と課題

子どもの確かな学びを実現するための授業実践と評価の在り方を探る。

(1) 結果

① 各学部を取組から

【小学部】

にじいろタイムの授業実践において、各時間ごとにc aミーティングを実施することで、多くの時間を費やすことなく、グループの子ども全員に対して変容や改善点など焦点化した評価を行うことができた。c aミーティングを通して、子どもの行動や表情に表れない部分についての読み取りを行うことや、教師間の評価の観点が共通化してきた。

【中学部】

数学の授業実践において、四つのキーワードを踏まえることで、教師は生徒の学び方を意識した具体的な手立てを行うようになり、生徒は学習の中で学んだことを主体的に活用するようになってきた。また、評価規準・評価基準を明確にすることで生徒の達成やつまずきの状況を読み取りやすくなった。

【高等部】

国語及び「くらし」の二つの指導の形態において、生徒の学びに着目した取組を通して、指導計画における各時間ごとの授業の位置付けが明確になり、生徒の学んだことを生かそうとするより主体的、意欲的な様子が確認できた。四つのキーワードを基に手立てを考えることで、教師の指導及び支援が具体的になった。また、評価シートの活用を通して、授業ミーティングの内容が次の授業に反映されやすくなってきた。

② アンケート結果から

【四つのキーワードを踏まえた授業実践】

四つのキーワードを踏まえた授業実践における子どもの変容に関しては、「とても思う：16.7%」、「思う：62.5%」と8割近くの回答があった。「とても思う」、「思う」の割合を学部別に見ると、小学部50%、中学部100%、高等部87.5%と学部間で若干の差が見られた。どの学部も四つのキーワードを意識することで、授業実践における手立てが具体的になったという意見が多かった。小学部に関しては、「適切な言葉遣いによる伝達が良好になった。」、「自分の評価への振り返りがうまくなった。」など、子どもの変容に効果があったという意見がある一方、「学習集団として取り入れが難しかった。」という意見も挙げた（図5-5）。

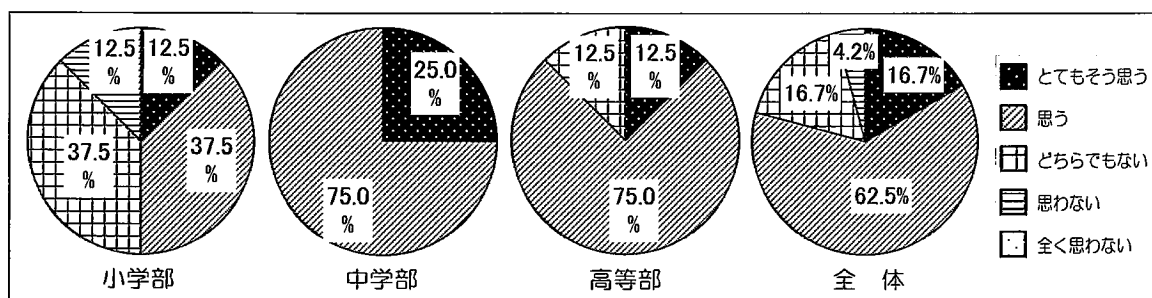


図5-5 アンケート項目5の結果

【評価規準及び評価基準の設定】

評価規準及び評価基準の設定において教師間の指導意図が共通理解できたかどうかに関しては、「とても思う：4.2%」，「思う：75.0%」 とほぼ8割が肯定的な回答であった。学部間の結果もほとんど差はなかった。(図5-6)。

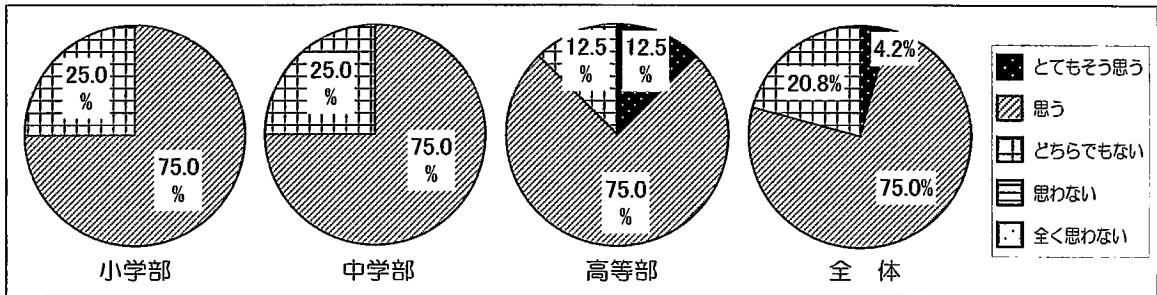


図5-6 アンケート項目6の結果

【子どもの変容のとらえ】

評価規準・評価基準を設定することで子どもの変容をとらえやすくなったという回答は、「思う：70.8%」であった。その理由として、「授業でねらうことがより明確になった。」，「評価を意識することで授業後の子どもの姿を想定するようになった。」，「子どもの様子をより客観的にとらえるようになった。」，「設定したことを基に具体的な子どもの様子を話し合えた。」などがあった。(図5-7)。

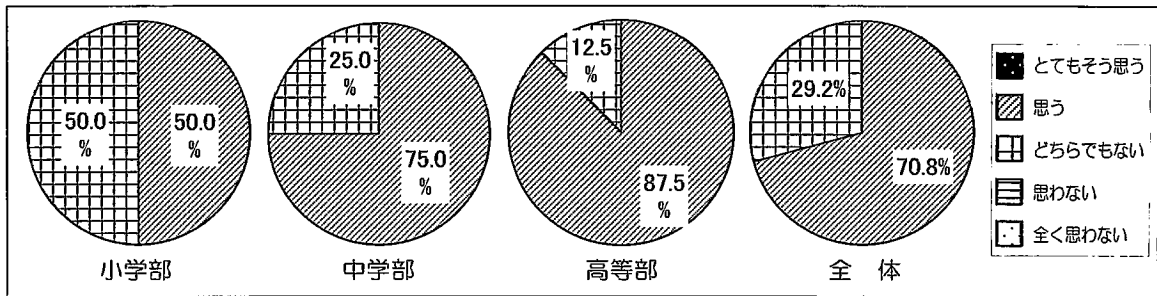


図5-7 アンケート項目7の結果

【見取り評価】

子どもの内面の評価に関しては、「とても思う：8.3%」，「思う：41.7%」，「どちらでもない：37.5%」，「思わない：12.5%」で肯定的な回答は5割であった。学部別に見てみると、肯定的な回答はそれぞれ、小学部75.0%，中学部50.0%，高等部25.0%と学部間で差が見られた(図5-8)。

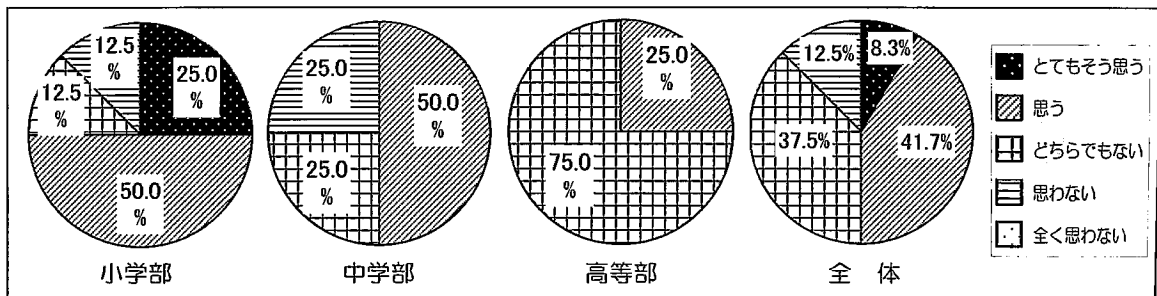


図5-8 アンケート項目8の結果

【形成的評価を通じた授業改善】

一単位時間の授業における個人目標の評価が次の授業の改善につながったかどうかに関しては、「とても思う：8.3%」、「思う：79.2%」、とほぼ肯定的な回答であった（図5-9）。

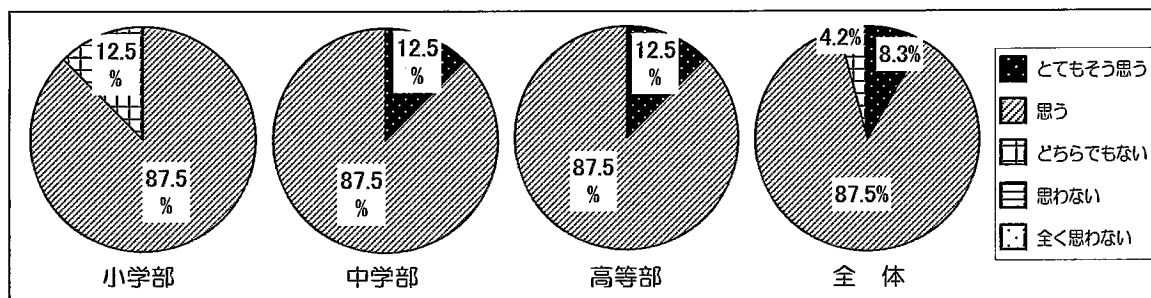


図5-9 アンケート項目9の結果

(2) 総合考察

小学部、中学部、高等部での授業実践を通して、教師が子どもの確かな学びに着目した手立てを行っていくことで「友達が使っているパソコンを一緒に見ながら自分の番まで待てるようになった」、「前回学習したことを同じ場面で活用した」、「学習や調理のときに自分から本を活用した」など、子どもが学んだことを活用している姿を確認できた。個人目標の達成のために、子どもの学びのプロセスを重視することが、着実な習得と活用を目指す上で有効であることが分かった。学部間で四つのキーワードの踏まえ方に少し差が見られたが、大切なのは、学びに対する子どもの内面部分のとらえとそこへの具体的な手立て、そして、その学びがどう高まっているかということ教師がつぶさに読み取ることであると考えられる。

授業改善のための形成的評価については、各学部で評価シートの作成・活用やミーティングのもち方の工夫などの取組によって、各時間ごとの授業での子どもの学びの様子を的確にとらえたり、教師間で指導の方向性を共通理解したりすることができた。評価の観点や評価規準・評価基準の設定、評価表の作成や活用など、可視化できる情報を基に教師間で授業を検討したことが、子どもの目標の焦点化と学びに応じた手立ての具体化といった授業改善の向上や、教師間での指導意図の共有化の促進につながったと考えられる。

(3) 成果と課題

【成果】

- 四つのキーワードを設けて子どもの学びに着目したことが、教師の授業実践に対する意識や具体的な手立ての変容及び子どもの確かな変容につながった。
- 評価という視点から授業実践を見つめ直すことで、子どもの目標の焦点化や教師間での指導意図の共有化がより可能となった。

【課題】

- 他の指導の形態についても、授業改善のための具体的・現実的な形成的評価の方法を検討することが必要である。
- 子どもの目標達成（未達成）の要因を分析したり、行動に表れない内面部分を読み取ったりする力量を高める。

3 研究内容3の結果及び成果と課題

系統的・継続的取組のための評価と情報の生かし方を探る。

(1) 結果

① 各学部取組から

【小学部】

「にじいろタイム」の取組における目標や内容を中学部につなげるために、小学部と中学部の職員との間で数回のミーティングを実施し、目標設定や働き掛け方などを共通理解したり、A児を含めての目標の確認を行ったりすることで、A児に変容が見られ、取組が継続されることが分かった。

【中学部】

数学の取組について、実態把握シート等を活用した学習課題の分析及び高等部の年間指導計画の情報を踏まえた指導計画の設定と実践を行い、それらの結果を評価表にまとめて引き継ぐことで、高等部への系統的・継続的指導につながる情報を整理することができた。

【高等部】

これまでのサポートシートの書式の改良を通して、Bさんの卒業後の支援内容や役割分担について明確にすることができた。また、進路決定後に支援会議を実施することで、卒業後のBさんや保護者の安心感や、進路先が配慮すべきことの明確化など、将来の生活に関係者間で見通しをもつことにつながった。

② アンケート結果から

【引継ぎ情報の有効性】

進学先（次の学部）や進路先における指導及び支援に対して、引き継いだ情報が踏まえられているかという質問に対する回答は、「思う：45.8%」、「どちらでもない：41.7%」、「思わない：12.5%」であり、肯定的な回答は半数を割っている。「思う」の理由としては、「子どもの支援や対応には生かされている。」、「実態を踏まえた取組がなされている。」などであった。「思わない」理由は、「書式や明らかなシステムがない。」が多く挙げられた（図5-10）。

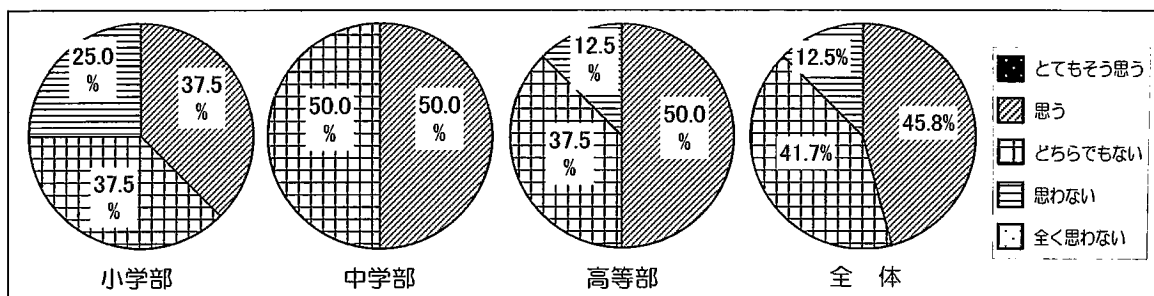


図5-10 アンケート項目10の結果

【想定した子どもの姿の評価】

移行前に想定していた子どもの姿が、移行後に見られたかという質問に対しては、「思う：41.7%」
 「どちらでもない：45.8%」
 「思わない：12.5%」であった。肯定的な回答は、小学部25.0%、中学部・高等部50.0%で学部間でやや差が見られた。「想定していた姿とは違ったが、子どもの今の力であると感じた。」「環境が変わったが、力を発揮している。」など、子ども自身の育ちを再度とらえている理由が挙げられた（図5-11）。

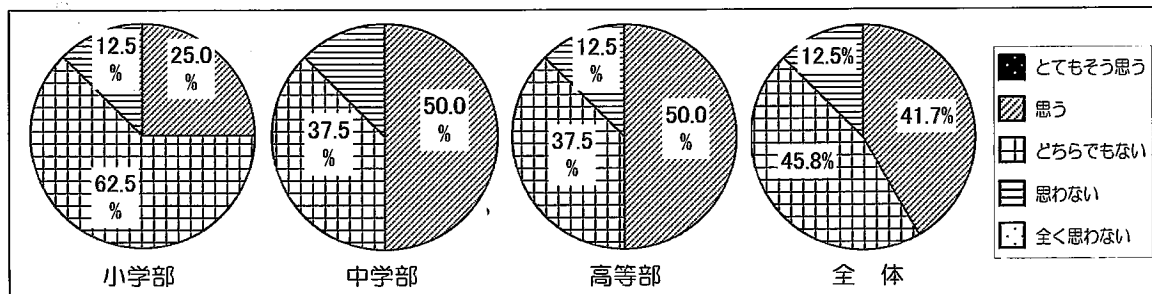


図5-11 アンケート項目11の結果

【情報を引き継いだ側の活用に関する満足度】

情報を受けた側が、指導及び支援に生かしていると感じているかどうかについて、情報を伝えた側に質問したところ、「思う：33.3%」
 「どちらでもない：54.2%」
 「思わない：12.5%」であった。学部間に差があり、情報活用に満足していると感じていると思う回答は、小学部12.5%、中学部50.0%、高等部37.5%であった。「思う」理由としては、「VTRを活用してともに考えたから」、「最新の情報を交換している。」など、移行後も何らかの方法で情報を更新する取組を行っていることが挙げられた。一方、「どちらでもない・思わない」に関しては、「うまく引き継げなかったと反省している。」「学部の体制や指導方針の違い」、「移行後当面の情報としては有効」などであった（図5-12）。

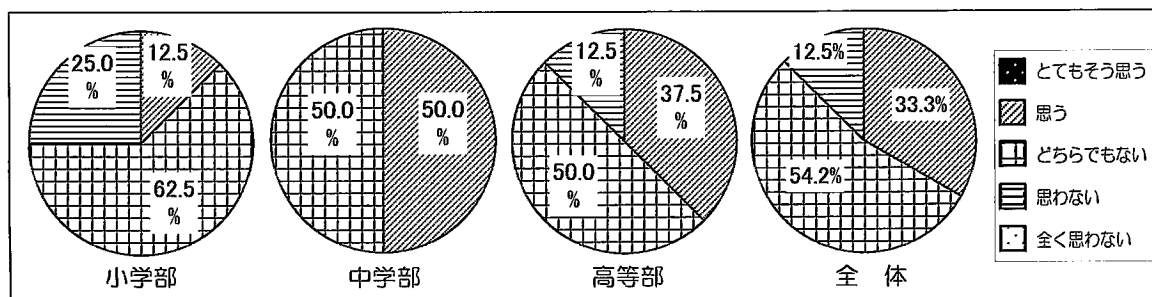


図5-12 アンケート項目12の結果

【総括的評価の情報内容の改善】

次につながる総括的評価の改善・工夫がなされたかという質問に対しては、「思う：25.0%」
 「どちらでもない：58.3%」
 「思わない：16.7%」であった。既習内容、情報量、書式など、整理することが必要であるという理由が多く見られた。取組を通した子どもの情報を、次の学習や次学部（進路先）へ引き継ぐために、有効にまとめるという総括的評価の在り方には更なる検討が必要である（図5-13）。

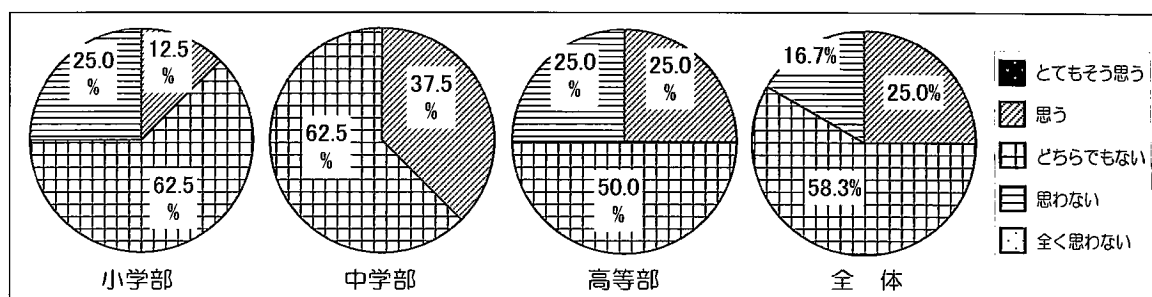


図5-13 アンケート項目13の結果

【12年間一貫教育のための改善点】

一貫教育の重要性は図5-14の結果から見えてくる。子どもの確かな学びを考える上で、縦のつながりは重要である。今後の改善の見込みとして「教育課程」、「年間指導計画」などの見直しの必要性が多く挙げられた。そのほかに、「教師の学部間交流」、「学部体験研修」などが挙げられた。

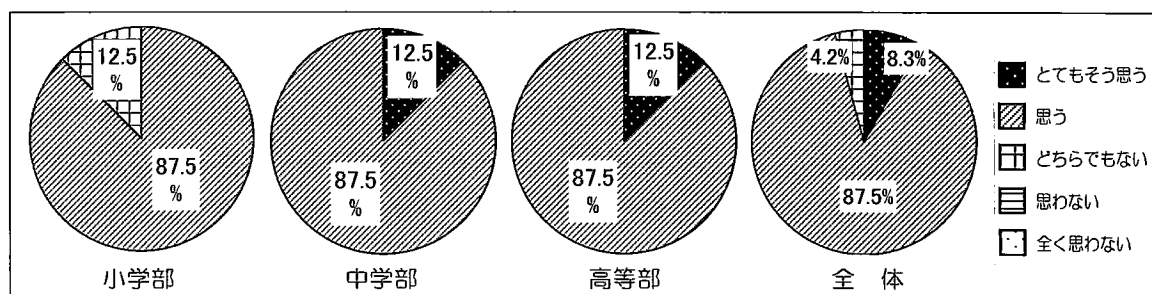


図5-14 アンケート項目14の結果

(2) 総合考察

VTRによる子どもの状態像の共通理解（小学部から中学部へ）、指導内容レベルでの情報伝達（中学部から高等部へ）、サポートシートの改良や支援会議実施（高等部から進路先へ）など、継続的・系統的指導のための情報伝達の工夫を行うことで、対象の子どもについて学習の成果や今後の取組の方向性を導き出すことができた。一方、アンケートの結果からは、引継ぎ情報の有効性や引継ぎ後の子どもの姿など、現行の取組に対して高い評価は得られなかった。また、情報を受けた側の満足度に対して、情報を伝えた側は高く評価していないことも明らかになった。

伝達情報の書式や伝達方法の改善には、情報を伝える側が、受け取る側の必要としている情報とは何かについて探り、実際の情報活用を想定した内容の検討が今後の課題であると考えられる。

(3) 成果と課題

【成果】

- 文書資料による引継ぎに加えて、卒業後の子どもの様子を確認することや可能な部分での情報の交換を行うことが、子どもの引継ぎ後の指導及び支援に有効であった。

【課題】

- 受け手側の必要としている情報という視点で、指導に関する総括的評価の工夫や情報伝達の在り方を見直す必要がある。

4 まとめ

わたしたちは、2年間の研究を通して、子どもがよりよく生きるために、学校教育としてもう一度考えなければならないことについて模索してきた。それは、子どもの確かな学びであり、子どもの学習内容の着実な習得と生活における活用を実現するための授業である。そのために、子どもに何をねらっていくのか根拠をもって導き出すこと（研究内容1）、子どもが着実に学び、学んだことを活用できるようにすること（研究内容2）、子どもの学びを将来につなげること（研究内容3）を具体的な実践を通して探ってきた。

研究内容1では、子ども本人や保護者のねがいを十分に踏まえながらも、子どもの状態像を細かく把握することや学習上の課題を分析することで、子どもに必要と考えられることを指導内容として焦点化し、目標として位置付けていく手続きを整理することができた。

研究内容2では、各授業ごとの子どもの学びを大切にすることで、行動目標の達成のみをねらっていたこれまでの授業実践から、子どもの学びの様子を分析的にとらえて四つのキーワードを通じた具体的な教師の手立てを検討する授業実践に変わってきた。子どもの学びに関する変容や教師の授業実践に対する意識や取組の変容が確認できた。

研究内容3では、これまでに蓄積した子どもの学びの情報に関する整理と伝え方の工夫を行うことで、次の学習や次のかかわり手に有効に引き継ぐことができ、縦の連携をより促進できた。

わたしたちは、評価に焦点を当てた研究を通して、これまでの授業づくりサイクルのすべての段階において、評価という視点の大切さを新たに付加し、子どもの確かな学びを実現するために、今や将来のために何が大切で、指導として今何をすべきかという授業の在り方を確認することができた。「指導の根拠を明確にする」とは、わたしたちの日々の取組に対して責任をもち、明確な意図をもって一人一人の子どもに対してより望ましい学習指導を常に模索する営みである。そして、そのことがより質の高い授業実践を可能にし、保護者、教師、進路先など、指導及び支援を引き継ぐ相手との指導の方向性の共有化につながると考える。

学校は、これからの長い人生を送っていく子どもにとって、期間の限られた貴重な学びの場であり、子どもの自立や社会参加に大きな影響を及ぼす場でもある。そのことをわたしたち教師は深く受け止めながら、よりよく生きる子どもを目指すために、学校教育という立場からできることを可能な限り保障していくことが求められる。

今回の研究では、評価という視点に目を向けて実践を進めることで、授業実践が向上するという手ごたえを確認することができた。今後は、更なる質の高い授業実践の構築に向けて、卒業した子どもの進路先の姿からわたしたちの取組を振り返る実践の追究や、学校全体の教育の枠組みである教育課程と年間指導計画について、12年間を見据えた視点で具体的な課題の整理と改善策の検討が必要であると考える。



写真5-1 高等部の授業風景

全体研究ポストアンケート

平成20年12月10日
研 究 部

研究のまとめの参考とさせていただきますので、以下の質問にお答えください。

1 所属学部にご印をつけてください。

(小 ・ 中 ・ 高 ・ その他)

2 以下の質問に対して、①～⑤のいずれか一つを選んでご印を付けてください。

①全く思わない	②思わない	③どちらでもない	④思う	⑤とても思う
---------	-------	----------	-----	--------

※ なお、いずれの回答に対しても、必ずコメントを書いてください。

<お願い>

アンケートによる回答に責任をもつ意味でも、すべての回答に対するコメント欄にその理由を書いてください。

研究内容1に関して

(1) 研究を対象とした指導の形態において、子どもの状態像をこれまでより適切にとらえることができるようになったと思いませんか？

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

※ 1・2・3と答えた方はその理由を、4・5と答えた方は、関連していると考えられることを具体的に書いてください。

(2) 研究を対象とした指導の形態において、より適切な一人一人の子どもの学習上の課題の分析ができるようになったと思いませんか？

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

※ 1・2・3と答えた方はその理由を、4・5と答えた方は、関連していると考えられることを具体的に書いてください。

(3) 研究を対象とした指導の形態において、一人一人の子どもにより望ましい学習内容の設定ができるようになったと思いませんか？

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

※ 1・2・3と答えた方はその理由を、4・5と答えた方は、関連していると考えられることを具体的に書いてください。

(4) 研究を対象とした指導の形態において、教育的ニーズ等から単元・題材における目標設定までの手続きが分かりやすくなったと思いませんか？

①	②	③	④	⑤
---	---	---	---	---

※ 1・2・3と答えた方はその理由を、4・5と答えた方は、関連していると考えられることを具体的に書いてください。

研究内容2に関して

- (5) 四つのキーワードを踏まえた授業実践を通して、学習場面における子どもの姿がこれまでと変わったと思うところがありましたか？

① ② ③ ④ ⑤

※①・②・③と答えた方はその理由を、④・⑤と答えた方はどのようなことが子どもに作用したのが具体的に書いてください。

- (6) 研究を対象とした指導の形態において、評価規準や評価基準を設定したことで教師側の指導の意図がより明確になったと思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①～⑤と答えた方はその理由を具体的に書いてください。

- (7) 研究を対象とした指導の形態において、評価規準や評価基準を設定したことで一人一人の子どもの変容をとらえやすくなったと思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①～⑤と答えた方はその理由を具体的に書いてください。

- (8) 研究を対象とした指導の形態において、目に見える姿の評価だけでなく、その背景にある目に見えない部分の評価について取り組むことができたと思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①・②・③と答えた方はその理由を、④・⑤と答えた方はどのようなことが具体的に書いてください。

- (9) 本時の個人目標の評価（形成的評価）を行うことで、次時の授業の改善につながっていたと思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①・②・③と答えた方はその理由を、④・⑤と答えた方は、何が、どのことにつながったのか具体的に書いてください。

研究内容3に関して

- (10) 今回の取組において、引き継いだ情報が次の学部（進路先）における指導や支援に踏まえられていると思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①・②・③と答えた方はその理由を、④・⑤と答えた方は、どの情報がどの部分に生かされているという理由を書いてください。

- (11) 対象の子どもに関して、移行後の実際の姿は、移行前に想定していた（将来の）姿に合っている（よりよく変容している）と思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①～⑤と答えた方は、その理由を具体的に書いてください。

- (12) 引継ぎ等により情報を受けた側が、その情報に関して、対象の子どもへの指導及び支援に十分に生かせたと感じていると思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①～⑤と答えた方は、その理由を具体的に書いてください。

- (13) 今回の取組を通して、子どもの学習状況等に関する評価（総合的評価）に関して、次の指導につながるよう情報整理の改善がなされたと思いますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①・②・③と答えた方はその理由を、④・⑤と答えた方は、具体的な改善策を書いてください。

- (14) 本校における小・中・高の一貫教育（最長12年間）を考えると、子どもの指導に関して改善の見込みが期待できると感じますか？

① ② ③ ④ ⑤

※①・②・③と答えた方はその理由を、④・⑤と答えた方は、具体的な改善策及び方法を書いてください。

御協力ありがとうございました。